死に対する態度と職業未決定および自意識の関連

The relationship between attitude toward death, and vocational indecision and self-consciousness

出﨑　洋樹　　菅　　千索
DESAKI Hiroki　　SUGA Sensaku
（和歌山大学教育学部第61期生）　（和歌山大学教育学部心理学教室）

本研究では大学生119名を対象に、死に対する態度尺度（死の恐怖・積極的受容・中立的受容・回避的受容）、職業未決定尺度（未熟・混乱・猶予・模索・安直・決定）、自意識尺度（公的自意識・私的自意識）を実施し、それぞれについて性別、学年の違いによる差異を検討するとともに、死に対する態度尺度と職業未決定尺度および自意識尺度との関連について検討した。t 検定の結果、平均値の差に関して、男女間では「中立的受容」「回避的受容」「安直」「決定」で有意な差が認められた。また、「猶予」「公的自意識」で有意な差のある傾向が認められた。一方、学年間では「私的自意識」だけに有意な差のある傾向が認められた。相関分析の結果、被験者全体では、「死の恐怖」および「回避的受容」に対しては、「未熟」「混乱」「安直」においてどちらも有意な相関が認められた。それに加えて、「死の恐怖」に対しては、「公的自意識」「私的自意識」、また「回避的受容」に対しては、「猶予」「決定」においても有意な相関が認められている。男女間の比較では、相関係数が男子は有意で女子は有意でなかったのは、「死の恐怖」に対する職業未決定尺度の「未熟」「安直」、および「回避的受容」に対する「猶予」であった。逆に女子が有意で男子が有意でなかったのは、「死の恐怖」に対する「私的自意識」、および「積極的受容」に対する「決定」であった。学年間の比較では、相関係数が 2 回生は有意で 3・4 回生は有意でなかったのは「死の恐怖」に対する「公的自意識」「私的自意識」、および「回避的受容」に対する「決定」であった。逆に 3・4 回生が有意で 2 回生が有意でなかったのは、「死の恐怖」に対する「未熟」「混乱」「安直」であった。

キーワード：死に対する態度、死観、職業未選択、自意識、大学生

問題と目的

昨今、大学卒業後の就職率の低下が問題視され、大学生の就職の現状は、1990年ごろのバブル崩壊後、長期間に渡って厳しい状況が続いている（上田、2012）。それと反比例する形で、パート・アルバイト採用割合が高くなっており、1992年には5.7％であったが、2002年は19.4％となり（平成18年 6 月内閣府発表、平成18年版「国民白書」）、深刻な社会問題となっている。フリーター増加の理由としては、一般的な就職難に加えて、多様な生き方や選択肢が認められるようになってきたことにより、大学生にフリーターへの肯定的見解に基づくフリーター志向が強まってきているとの指摘がある（安達・太田、2004）。ここでフリーターとは15～34歳（ただし、学生と主婦を除く）のうち、パート・アルバイト（派遣等を含む）をしている人と働く意志のある無職の人をいう（平成15年 5 月内閣府発表、平成15年度版「国民生活白書」）。菰田（2007）の研究では、フリーターとは社会の枠組みから降りてしまっており、必ずしも希望の実現を志向しているわけではなく、また外的な価値観にこだわらないだけではなく、内在的な価値観にもこだわりをみせないという大卒フリーターの特徴が明らかになっている。さらに、なぜこのようなフリーター志向になったかを考える上で、青年期における就職に対する重要性について着目している。青年期は職業につく準備期間とされ、とくに青年期後期に行われる進路選択は非常に重要であると考えられており（杉本･速水、2012）、また未就職の中で職業忌避的傾向の強い者は「仕事をすること」に対して総体的に否定的なイメージを抱いていること、具体的には「単調であって、個性的な生き方を損なうものであり、充実感がもてず、苦しく不愉快である」というイメージを抱いている（古市、1995）。

これらから青年期と職業に対する関連が見られることがわかり、青年期に受ける何らかの側面が就職に対しても影響を与えているのではないかと考えられる。

青年期のモラトリアムと職業未決定の関連について検討した森本（2008）の研究では、大学生374名を対象

にした調査が行われている（教職課程選択者は176名、教職課程非選択者は198名）。調査項目は①職業未決定尺度（下山、1986）を改変したもので、30項目からなり「モラトリアム」「不安」「模索」という３つの下位尺度をもつ。②多次元自我同一性尺度で青年期固有のアイデンティティ感覚の構造を測定するもので、「自己の斉一性・連続性」「対他的同一性」「対自的同一性」「心理社会的同一性」いう４つの下位尺度をもつ。その結果、自己意識が不明確な場合には、職業決定に対する焦りや不安を感じたり、やりたい職業がみつからず、職業決定を先に延ばすモラトリアム状態となる傾向が明らかになっている。また、職業未決定がアイデンティティの形成に及ぼす影響について検討した結果、職業決定を延期するモラトリアム状態と職業決定に関する不安がアイデンティティの形成に影響を与えていることが指摘されている。さらに、アイデンティティの形成が職業未決定に及ぼす影響については、自己意識の不明確さが職業未決定に影響を与えている可能性が示唆されている。そして近年の大学生は自己のやりたいことを中心とする職業決定がなされる傾向があるのかもしれないと述べている。

一方、菰田（2005）によれば、フリーターを選択する者の特徴として、職業価値観として社会的な評価を重視していない事が示唆されている。そして仕事に生きがいを求める仕事志向が減少し、余暇に生きがいを求める余暇志向と、仕事と余暇の両方に力を入れる仕事・余暇両立が増加している傾向にあり、さらに理想の条件として、仲間と楽しく働ける仲間志向、専門知識や特技が生かせる専門志向が増加している事も指摘されている（NHK放送文化研究所、2000）。

それに加えて安藤（2011）では、大学生の職業未決定者の類型化が行われている。調査対象は大学生202名の中から職業アイデンティティ低群であった職業未決定にある150名である。調査項目は①Vocational Identity Scale、②進路不決断尺度、③余暇重視尺度、④アパシー心理性格尺度である。この調査結果からは、職業アイデンティティ低群の大学生は、職業未決定に向き合う姿勢や心理的特性により、いくつかの型に分かれることが明らかになった。(1)職業選択を回避して自分の時間を優先する「現実回避型」。この学生はモラトリアム万能感が高く、本業である学業からのみ撤退し、そのことで葛藤することができない状態にあり、就職という課題に向き合えず、悩めない学生である。(2)不安と無力の中で焦り、援助を求める「焦燥空転型」で、このタイプの学生は、職業決定に向き合おうとしつつも無力感に悩まされることで、自分のやりたいことが見出せなくなっている状況にある。(3)必要になれば社会参加も行うが、職業より自由な生き方を大切にする「自由享受型」。就職を意識せず余暇活動に従事する青年は、他者の目を気にせずに自由に振舞っているものの、内面では余暇は生きがいや生きている実感に繋がってはいない。(4)職業に対して両価的な態度が存在する「不安依存型」で、職業を重視しつつも未決定状態でも周囲の期待に応えたい、または批判にさらされたくないとの思いから不安に陥っていると考えられる。(5)就職に向けて目標は定まったが準備不足に不安を感じている「課題直面型」は３回生の学生に多く、４回生の学生はいなかった。就職活動に実際に取り組むことでアパシー傾向が減少する可能性も考えられる。経済成長の勢いが弱まった影響で、経済的な格差が学業への意欲に影響を与える現代の状況では、アイデンティティ形成において、職業決定を必ずしも重視しない学生群が表れてきているのではないかと示唆されている。

このように職業決定と青年期の関連に関して、森本（2008）の先行研究では、モラトリアムが職業決定に影響を及ぼすこと、また安藤（2011）の先行研究では、アイデンティティの確立によって職業決定に変化が見られる事が示されている。そうしたなかでモラトリアムとアイデンティティには死に対する態度が関わっているのではないかと推察されるが、先行研究においては青年期におこるモラトリアムやアイデンティティの問題と職業決定に関する研究は多く扱われているものの、死に対する態度や考え方と職業決定との関連を扱った研究がほとんど行われていない。また、青年期における心理臨床の現場では「人にどのように思われるか気になる」「視線が怖い」「人前で緊張する」（堀井、2002）のように「他人の評価に意識が向く」という人が少なからず存在する。自己にとって、他者から自己の側面をどう見られているか、自身が自己の側面をどのように見ているかということは、アイデンティティの形成において重要な役割を担っていると考えられるため、自意識と死への態度には関連が見られるのではないかと予想された。

そこで本研究では、死に対する態度に対して、職業未決定の状態および自意識がどのように関係しているかについて、性別および学年も考慮しながら実証的に検討する。

方法

１．被験者

和歌山大学教育学部の大学生119名（19歳～25歳）。学年別および男女別の人数を表１に示す（分析では３回生と４回生をあわせて３・４回生としている）。

表１　被験者の内訳と合計

	男子	女子	合計
２回生	46	28	74
３回生	17	16	33
４回生	8	4	12
合計	71	48	119

２．質問紙

①死に対する態度尺度

私たちが死に対してもっている態度を多次元的に評価するもので、Gesser *et al*.（1987）が開発したものを河合・下仲・仲里（1996）によって翻訳された尺度

である。本尺度は死の受容という観点から死に対する態度を測定しようとする尺度であり「死の恐怖」「積極的受容」「中立的受容」「回避的受容」の４つの下位尺度に分かれる。

②職業未決定尺度

下山（1986）によると、青年後期の重要な発達課題である職業決定の際、うまく行えなかったことでおこる社会的・経済的なアイデンティティの危機に対しては、適切な援助が必要であるという。また、職業未決定は「積極的な職業探索状態から消極的アパシー状態まで」多様な状態を示している。実際に援助を行う際に、どのような職業未決定の状態であるのかの見極めることが重要であり、本尺度はその多様な職業未決定状態を測定する尺度で「未熟」「混乱」「猶予」「模索」「安直」「決定」という６つの下位尺度に分かれる。

③自意識尺度

Feningstein *et al*.（1975）は、自分の内面･気分など外から見えない自己の側面に注意を向ける「私的自意識」および自分の外見や他者に対する行動など外から見える自己の側面に注意を向ける「公的自意識」に関する個人差を測定する尺度を作成した。それをもとにして菅原（1984）が独自の立場から自意識尺度の日本語版を作成したもので､「公的自意識」「私的自意識」の２つの下位尺度に分かれる。

３．手続き

集団式により、最初に研究への協力依頼およびプライバシー関連等の一般的な説明を行った後、フェイスシート、死に対する態度尺度、職業未決定尺度、自意識尺度が印刷された冊子を配布した。フェイスシートでは学年、性別、年齢、クラブ・サークルの所属、住居、年上、年下のきょうだいの有無などを回答させている（その一部は紙面の都合で本報告には含まれていない）。なお、冊子は尺度が３つあったためにカウンターバランスがとれるよう尺度の順を入れ替えた３タイプのものを均等に配布した。そしてそれぞれに質問紙への回答に関する教示や注意事項をまとめて述べたうえで回答させた。時間制限は課さなかったが、実際の所要時間はおよそ10分から20分程度であった。

結果

１．死に対する態度尺度、職業未決定尺度、自意識尺度についての平均値の比較

得られたデータの全体および学年別（２回生・３・４回生）と性別（男子・女子）の平均値と標準偏差を表２に示す。また、死に対する尺度、職業未決定尺度、自意識尺度をそれぞれ測定変数、学年、性別を独立変数としてｔ検定を行った結果が有意であったもの（$p<0.05$）、または有意な傾向にあったもの（$p<0.1$）を表３、４に示す。

（1-1）男女間における平均値の比較

男女間で平均値の差が有意であったのは、死に対する態度尺度における「中立的受容」「回避的受容」、就職未決定尺度における「安直」「決定」、有意な傾向にあったのは、就職未決定尺度における「猶予」、自意識尺度における「公的自意識」であった。平均値は「中

表２　各測定変数の全体及び下位群ごとの平均と標準偏差（SD）

測定変数			全体	性別		学年	
				男	女	２回生	３・４回生
		N	119	71	48	74	45
死に対する態度尺度	死の恐怖	平均	22.34	22.93	21.48	22.58	21.96
		SD	6.38	6.84	5.60	6.08	6.91
	積極的受容	平均	8.53	8.49	8.58	8.70	8.24
		SD	3.11	3.07	3.22	3.25	2.89
	中立的受容	平均	9.35	9.76	8.75	9.45	9.20
		SD	2.74	2.56	2.91	2.63	2.94
	回避的受容	平均	12.58	13.54	11.17	13.01	11.87
		SD	4.63	4.72	4.14	4.86	4.18
職業未決定尺度	未熟	平均	10.42	10.58	10.19	10.32	10.58
		SD	3.45	3.57	3.29	3.31	3.70
	混乱	平均	14.67	14.80	14.48	14.26	15.36
		SD	3.83	3.87	3.80	3.52	4.25
	猶予	平均	10.55	10.96	9.96	10.36	10.87
		SD	3.19	3.63	2.28	3.09	3.36
	模索	平均	11.52	11.32	11.81	11.57	11.44
		SD	3.19	3.41	2.85	3.21	3.21
	安直	平均	11.29	12.00	10.25	11.43	11.07
		SD	3.08	3.23	2.51	3.14	3.00
	決定	平均	8.62	8.94	8.15	8.49	8.84
		SD	2.16	2.03	2.26	1.97	2.43
自意識尺度	公的自意識	平均	54.35	52.99	56.37	54.49	54.13
		SD	10.24	9.99	10.36	9.96	10.79
	私的自意識	平均	47.97	48.14	47.71	46.80	49.89
		SD	7.49	6.99	8.24	7.49	7.16

表 3　男女を独立変数とした t 検定表

従属変数	等分散性の検定		2 つの母平均の差の検定		
	F 値	有意確率	t 値	自由度	有意確率
中立的受容	0.25	0.621	2.00	117	0.048*
回避的受容	1.57	0.213	2.82	117	0.006**
猶予	12.37	0.001**	-1.84	116	0.068†
安直	4.06	0.046*	-3.31	115	0.001**
決定	0.29	0.589	-2.01	117	0.047*
公的自意識	0.10	0.753	-1.79	117	0.076†

注：**$p<0.01$、*$p<0.05$、†$p<0.10$

表 4　学年を独立変数とした t 検定表

従属変数	等分散性の検定		2 つの母平均の差の検定		
	F 値	有意確率	t 値	自由度	有意確率
私的自意識	0.00	0.958	-1.77	105	0.080†

注：†$p<0.10$

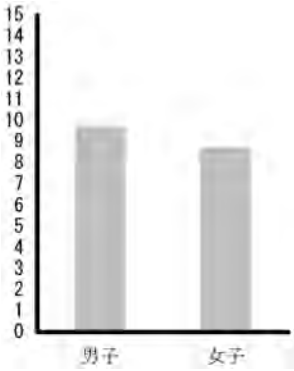

図 1　中立的受容の平均値

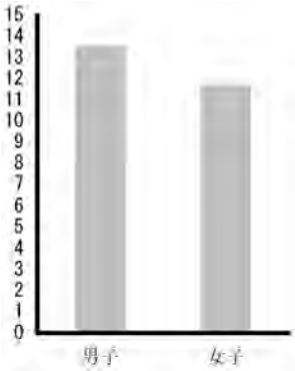

図 2　回避的受容の平均値

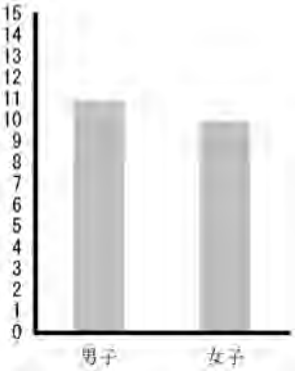

図 3　猶予の平均値

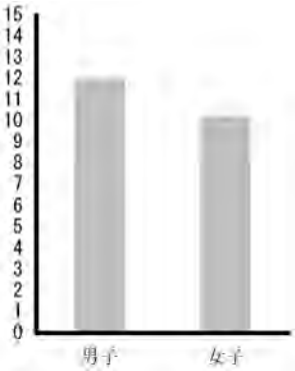

図 4　安直の平均値

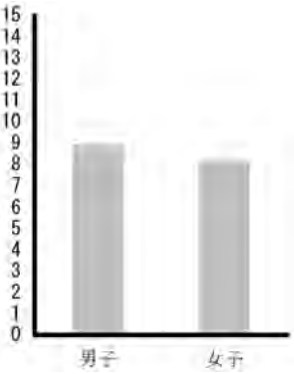

図 5　決定の平均値

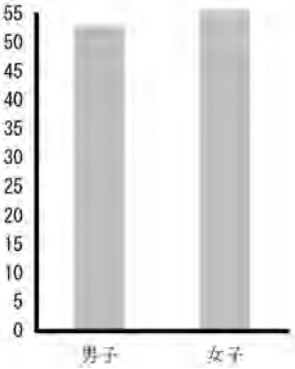

図 6　公的自意識の平均値

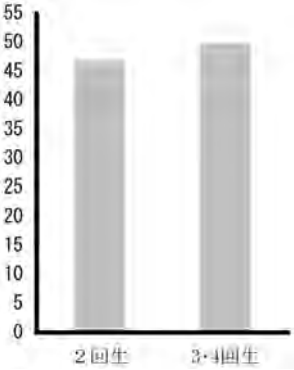

図 7　私的自意識の平均値

立的受容」「回避的受容」「猶予」「安直」「決定」で男子が高く（図 1 ～ 5）、「公的自意識」で女子が高かった（図 6）。

（1-2）学年間における平均値の比較

学年間で t 検定の結果が有意であったものはなく、自意識尺度における「私的自意識」で有意な傾向が見られ、3・4 回生のほうが平均値は高かった（図 7）。

2．死に対する態度尺度と職業未決定尺度、自意識尺度の相関分析

つぎに死に対する態度尺度と職業未決定尺度、自意識尺度との相関係数を、全体および性別（男子、女子）、学年別（2 回生、3・4 回生）ごとに求めた。その結果を表 5 ～ 9 に示す。

（2-1）被験者全体について

被験者全体で見た場合（表 5）、「死の恐怖」と「回避的受容」に対して「未熟」「混乱」「安直」にそれぞれ正の有意な相関が見られた。また「死の恐怖」に対して「公的自意識」「私的自意識」にも正の有意な相関、「回避的受容」に対しては「猶予」に正の有意な相関、「決定」には負の有意な相関が見られた。

（2-2）性別ごとの特徴について

男子は（表 6）、「死の恐怖」と「回避的受容」に対して「未熟」「混乱」「安直」と正の有意な相関が見ら

表 5　死に対する態度と職業未決定および自意識の相関係数（全体：119名）

死に対する態度尺度	職業未決定尺度						自意識尺度	
	未熟	混乱	猶予	模索	安直	決定	公的自意識	私的自意識
死の恐怖	0.240**	0.295**	0.092	0.093	0.232*	-0.105	0.321***	0.195*
積極的受容	-0.013	-0.006	0.067	0.063	0.061	0.076	0.078	-0.012
中立的受容	-0.013	-0.030	0.048	0.020	0.041	0.123	0.047	0.041
回避的受容	0.359***	0.366***	0.363***	0.072	0.403***	-0.250**	-0.013	-0.042

注：***$p<0.001$、**$p<0.01$、*$p<0.05$、†$p<0.1$

表 6　死に対する態度と職業未決定および自意識の相関係数（男子：71名）

死に対する態度尺度	職業未決定尺度						自意識尺度	
	未熟	混乱	猶予	模索	安直	決定	公的自意識	私的自意識
死の恐怖	0.318**	0.278*	0.131	0.065	0.279*	-0.170	0.353**	0.114
積極的受容	0.071	-0.057	0.165	0.155	0.102	-0.087	0.107	-0.144
中立的受容	-0.064	-0.147	-0.095	-0.017	-0.022	0.118	0.077	0.114
回避的受容	0.333**	0.315**	0.367**	0.116	0.293*	-0.281*	0.077	0.010

注：***$p<0.001$、**$p<0.01$、*$p<0.05$、†$p<0.1$

表 7　死に対する態度と職業未決定および自意識の相関係数（女子：48名）

死に対する態度尺度	職業未決定尺度						自意識尺度	
	未熟	混乱	猶予	模索	安直	決定	公的自意識	私的自意識
死の恐怖	0.074	0.321*	-0.083	0.183	0.049	-0.064	0.340*	0.323*
積極的受容	-0.142	0.069	-0.139	-0.095	0.008	0.293*	0.035	0.148
中立的受容	0.034	0.107	0.264†	0.117	0.009	0.064	0.081	-0.050
回避的受容	0.401**	0.462**	0.278†	0.050	0.503***	-0.362*	-0.049	-0.140

注：***$p<0.001$、**$p<0.01$、*$p<0.05$、†$p<0.1$

表 8　死に対する態度と職業未決定および自意識の相関係数（2回生：74名）

死に対する態度尺度	職業未決定尺度						自意識尺度	
	未熟	混乱	猶予	模索	安直	決定	公的自意識	私的自意識
死の恐怖	0.172	0.216†	0.026	0.123	0.184	-0.083	0.371**	0.357**
積極的受容	-0.130	-0.113	0.074	0.148	-0.061	-0.009	0.106	0.090
中立的受容	-0.073	-0.103	0.022	-0.110	0.068	0.092	0.158	0.077
回避的受容	0.345**	0.380**	0.354**	0.018	0.347**	-0.238*	-0.103	0.009

注：***$p<0.001$、**$p<0.01$、*$p<0.05$、†$p<0.1$

表 9　死に対する態度と職業未決定および自意識の相関係数（3・4回生：45名）

死に対する態度尺度	職業未決定尺度						自意識尺度	
	未熟	混乱	猶予	模索	安直	決定	公的自意識	私的自意識
死の恐怖	0.334*	0.413**	0.190	0.048	0.301*	-0.124	0.253†	-0.015
積極的受容	0.189	0.186	0.072	-0.098	0.290	0.223	0.029	-0.168
中立的受容	0.071	0.073	0.093	0.212	-0.007	0.170	-0.108	0.010
回避的受容	0.411**	0.420**	0.424**	0.171	0.509***	-0.260†	0.140	-0.075

注：***$p<0.001$、**$p<0.01$、*$p<0.05$、†$p<0.1$

れた。また「死の恐怖」に対しては「公的自意識」とも正の有意な相関、「回避的受容」に対しては「猶予」「決定」に正の有意な相関が見られた。

女子は（表7）、「死の恐怖」に対して「混乱」「公的自意識」「私的自意識」と正の有意な相関、また「積極的受容」に対して「決定」にも正の有意な相関が見られた。「回避的受容」対して「未熟」「混乱」「安直」「決定」には正の有意な相関が見られた。

(2-3) 学年別ごとの特徴について

2回生は（表8）、「死の恐怖」に対して「公的自意識」「私的自意識」に正の有意な相関が見られた。また「回避的受容」に対して「未熟」「混乱」「猶予」「安直」に正の有意な相関が見られ、「決定」とは負の有意な相関が見られた。しかし、「死の恐怖」と「職業未決定尺度」との相関はまったく見られなかった。

3・4回生は（表9）、「死の恐怖」と「回避的受容」

に対して「未熟」「混乱」「安直」にそれぞれ正の有意な相関、また「回避的受容」に対して「猶予」に有意な相関が見られた。

考察

1．平均値の比較結果からの考察

t検定を行った結果、死に対する態度尺度の下位尺度である「中立的受容」「回避的受容」、職業未決定尺度の下位尺度である「猶予」「決定」「安直」、自意識尺度の下位尺度である「公的自意識」において、男女間で有意な差または有意な差のある傾向が認められた。これらの結果をもとに考えてみると、男子の方が就職に関して猶予感を持ち、就職に関してじっくりと思慮したいと考えていることがうかがえた。また、具体的にどのような職種に就きたいかの展望をしっかりと持っている人や、単に就職しなければいけないという意識から安直に就職するなど、具体的な行動を起こす人が多い傾向がみられた。

一方、女子は就職に関して、思慮する時間をあまり必要とはしていないが、具体的な展望は男子と比べると低く、職種などに対しては慎重な傾向が見られた。このことから、男女雇用機会均等法など現代社会において男女が平等に就職できるような法律が施行されてはいるが、男子は就職して家庭を養わなければならないという考えが社会的背景に存在するため、このような結果になったのではないかと推察される。

また死に対する態度に関しては、男子の方が死を中立的、または回避的に受容している傾向が見られた。これらから大学生の場合、男子は女子と比較すると死の必然性を受け入れるとともに、生へのあきらめが高い可能性がうかがえる。

2．相関分析の結果からの考察

(2-1) 被験者全体について

被験者全体では、「死の恐怖」と「未熟」「混乱」「安直」に正の有意な相関が見られた。また、「回避的受容」と「未熟」「混乱」「猶予」「安直」から正の有意な相関、「決定」からは負の有意な相関が見られた。これらのことから、死に対して恐怖を抱いている人は、職業決定の際に人間はいつか死んでしまい、どのように死んでしまうかもわからないという中で、職業に対しての意味合いを見出すことができず、他者と比べると就職に対する意識を高めることができていないのではないかと解釈される。そして自分がどのような職業に就きたいのか、どのような職業に就くべきであるのかということに混乱が生じているのである。生きていることからのあきらめから死を受容している場合は、人生に意味合いを見出すことができず、どうせ死んでしまうのだから就職しても意味がないと考え、自分の中で職業に対しての意味合いをみつけるために、職業決定における猶予を欲しているとも考えられる。また死を回避的に受容するあまり、あえて就職に対して意味合いを見出さずに、安易に職業を決定する場合もあることが考えられる。「死の恐怖」と「公的自意識」「私的自意識」にみられた正の有意な相関からは、「死の恐怖」が高い人の方が、外面、内面からみた自己の側面に対する意識が高いことが分かる。したがって、死の恐怖の得点が高い人は、精神に敏感なところがあり、他者にどう思われているか、自分はどのような人間であるかということを、よく考えている傾向があるのではないかと推察される。

(2-2) 性別ごとの特徴について

男子と女子ともに、「死の恐怖」および「回避的傾向」と「未熟」「安直」に有意な正の相関が見られたが、一方「回避的受容」と「猶予」では男子で有意な正の相関が見られたが、女子では見られなかった。また女子は、「死の恐怖」と「私的自意識」に有意な相関が見られたが、男子では見られなかった。これらから、男子は死の恐怖が高くなれば、職業決定に対して未熟になり、就職について安易な考えをもってしまう傾向にあり、女子は「死の恐怖」と就職に対しては関連があまりないと判断される。

(2-3) 学年ごとの特徴について

3・4回生は「死の恐怖」と「未熟」「混乱」「安直」に有意な相関が見られたが、2回生には「死の恐怖」と職業未決定尺度の下位尺度とは有意な相関がまったく見られなかった。また「死の恐怖」と「公的自意識」「私的自意識」では2回生に有意な相関が見られるが、3・4回生には見られなかった。学年間の各群の平均値には差が見られないことから、2回生の死の恐怖には具体的な対象が無いため、自己へ意識を向けることで、「死の恐怖」と「公的自意識」「私的自意識」に有意な相関が見られたのではないかと考えられる。また3・4回生になると、就職活動という大きな課題が出現し、「死の恐怖」が自己への意識よりもより具体的な就職活動との関わりが大きくなることで、このような結果が生じたのではないかと考えられる。

まとめ

本研究では大学生119名を対象に、死に対する態度尺度、職業未決定尺度、自尊感情尺度を実施し、それぞれについて性別、学年の違いによる差異を検討するとともに、死に対する態度尺度と職業未決定尺度および自意識尺度との関連について検討した。

t検定の結果、平均値の差に関して、男女間では死に対する態度の「中立的受容（男＞女）」と「回避的受容（男＞女）」、職業未決定尺度の「安直（男＞女）」と「決定（男＞女）」で有意な差が認められた。また、職業未決定尺度の「猶予（男＞女）」および自意識尺度の「公的自意識（女＞男）」で有意な差がある傾向が認められた。一方、学年間では自意識尺度の「私的自意識（3・4＞2）」だけで有意な差がある傾向が認められた。

相関分析の結果、被験者全体では、死に対する態度

尺度の「死の恐怖」および「回避的受容」に対しては、職業未決定尺度の「未熟」と「混乱」と「安直」においてどちらも有意な相関が認められた。それに加えて、「死の恐怖」に対しては、自意識尺度の「公的自意識」と「私的自意識」、また「回避的受容」に対しては、職業未決定尺度の「猶予」と「決定」においても有意な相関が認められている。

男女間の比較では、相関係数が男子は有意で女子は有意でなかったのは、死に対する態度尺度の「死の恐怖」に対する職業未決定尺度の「未熟」と「安直」、および「回避的受容」に対する「猶予」であった。逆に女子が有意で男子が有意でなかったのは、死に対する態度尺度の「死の恐怖」に対する自意識尺度の「私的自意識」、および「積極的受容」に対する「決定」であった。

学年間の比較では、相関係数が２回生は有意で３・４回生は有意でなかったのは死に対する態度尺度の「死の恐怖」に対する自意識尺度の「公的自意識」と「私的自意識」、および「回避的受容」に対する職業未決定尺度の「決定」であった。逆に３・４回生が有意で２回生が有意でなかったのは、死に対する態度尺度の「死の恐怖」に対する「未熟」と「混乱」と「安直」であった。

これらのことから以下のような解釈がなされた。死に対して恐怖を抱いている場合、どのような職業に就きたいかが明確に意識されておらず、そのためにどのような行動を行えばよいかを定めることができていない。そのことから、現状で容易に就職できそうな就職先を選び、職種、待遇にまで展望を向けていない傾向がある。また、これから自分が家族を養わなければならない環境に置かれている場合、自分が生活の基盤を作らなければならないという重圧から生じる死の恐怖が、就職に対して明確な展望を築く際に障害になっている可能性がある。他者との関係の中で、目標に向かい共に行動することで自己の役割や意味合いを確認し、かつ自分が必要とされている環境におかれている方が、死の恐怖が就職の決定に影響を与えることが少ない傾向にある。

今回の研究では死の恐怖や回避的受容、いわば生きることへのあきらめから死をとらえることが、職業決定に影響を与えていることが推察され、死を積極的、中立的に受容している場合は職業決定になんら影響を与えないと予想された。現在フリーターやニートである若者は、日本の経済の現状が生み出した職業に対する新たな価値観を享受している。そのため、例え今後経済が成長し雇用が増えたとしても、現状の影響を受けた世代が就職を行うとは限らない。就職状況の変化の中で、死に対する態度の変遷していることを予測した上で、雇用を増やす重要性とともに、フリーターやニートである若者の死に対する態度についての観点からも、就職の問題を取り上げていかなければならないのではないかと考えられる。

引用文献

安達智子・太田さつき（2004）若者層におけるフリーター志向．日本心理学会第68回大会発表論文集，207-208．

安藤聡一朗（2011）日本の大学生の職業未決定類型化に関する一考察－アパシー心性及び余暇重視との関連から－．青年心理学研究，**23**，175-184．

Feningstein，A.，Scheiner，M．F.，& Buss，A．H.（1975）Public and private self-consciousness: Assessment and theory．*Journal of Consulting and Clinical Psychology*，**43**，522-527．

古市裕一（1995）青年の職業忌避的傾向とその関連要因についての検討．進路指導研究（日本進路指導学会研究紀要），**16**，16-22．

Gesser，G.，Wong P．T．P.，& Recker，G．T.（1987）Death attitudes accross the life-span: The developement and validation of the death attitude profile．*Omega: Journal of Death and dying*，**18**，113-128．

堀井俊章（2002）青年期における対人不安意識の発達的変化（続報）．山形大学紀要（教育科学），**13**，79-94．

河合千恵子・下仲順子・中里克治（1996）老年期における死に対する態度．老年社会科学，**17**，107-116．

菰田孝行（2005）大学生の職業選択行動の類型と職業価値観との関連．進路指導研究（日本進路指導学会研究紀要），**23**，1-9．

菰田孝行（2007）大学生における職業価値観と職業選択行動との関連．青年心理学研究，**18**，1-17．

森本文子（2008）大学生における職業未決定とアイデンティティとの関連．九州大学心理学研究，**9**，205-213．

NHK放送文化研究所（2000）現代日本人の意識構造第５版．日本放送協会．

下山晴彦（1986）大学生の職業未決定の研究．教育心理学研究，**34**，20-30．

菅原健介（1984）自意識尺度（self-conciousness scale）日本語版作成の試み．心理学研究，**55**，184-188．

杉本英晴・速水敏彦（2012）大学生における仮想的有能感と就職イメージおよび時間的展望．発達心理学研究，**23**，224-232．

上田昌美（2012）大学生の就職率調査の現状とその問題点．嘉悦大学研究論集，**54**，137-151．